うちはおとうさん、タヌキです。
先生にあてられたカエちゃんがそう言った。
とったん、教室の生徒たちがどっと笑った。
クラスで一番なかよしのアコちゃんも笑っ
てた。
若い女の先生までこらえきれずに、「口に
手をあてて笑っていた。
自分の席のところでつっ立ったまま、カエ
ちゃんはきょとんとしていた。
ちらっと見ると三年三組の教室の笑いのうず
がようやくおさまった。
顔の表情をきゅっと元にもどした女の先生
は、「カエちゃんに説明してくれた。
千枝の中によ、タヌキなんてないのですよ。
そのが日に栃木から帰るなり、カエちゃんは台
所にいたおかあちゃんの前掛けをひっぱって

（えー、そう言ったのかあ・…・！）
うったえた。
「また、だまされた」
「なんのこと？」
「おとうちゃん」
「干支の話」
「おとうちゃんが、どうしたん」
「干支の話」
「おとうちゃんが、どうしたん」
「はんまに、もう・・・」
「おかあちゃんも、わかってたん？」
「いつものことやんか」
「ひらひら」
「ああ、あれかいな。あんた、まともに信じたんか？」
「おかあちゃんも、わかるんか」
「いつものことやんか」
「おかあちゃんも、わかってるん？」
「はんまに、もう・・・」
「そうや。今日は先生に、お家の人の干支を
に、カエちゃんは宿題を思い出した。
茶碗を渡しながら聞いてきたおかあちゃん
は、今日の授業のことを晩ごはんの時に話すのが
日の課題になっていた。
それは、昨日の夜のことだった。
小学二年生になったカエちゃんは、毎日そ
教えてもらってきなさいって言われたんや。

「お母ちゃんの干支って、なに？」

「干支ねえ。たしか、うちのは酉だったかな」

おかあちゃんはカエちゃんの質問にまじめに答えてくれた。

「そしたら、おとうちゃんはカエちゃんの質問に答えてくれた。

カエちゃんは、テーブルの向かいに座っているおとうちゃんにも聞いてみた。

おとうちゃんは、大皿に盛られた鳥のから揚げに箸をのそそうとしていた。

カエちゃんの質問に、おとうちゃんはおかずをとる手をとめた。

「わしの干支か、えー・とー」

「おとうちゃん、ふざけんといでー！

カエちゃんに言われて、おとうちゃんは、

なんもふざけてへんでー。

と言いないながら、真剣に考えてみるふりをし

と答えた。

つまらない。おいの干支はなあ、タヌキゃー。
「タヌキかあー」

十二支というものを全部知らなかったカエちゃんは、おとうちゃんの言葉をまるごと信じたのだった。

カエちゃんはその夜帰ってきたおとうちゃんに、そのことについて抗議した。

「おとうちゃんのホラふき！」「おとうちゃんのほんまの干支はな、キツネやおとうちゃんのほんまの干支はな。間違えたわ。実はおとうちゃんはそう言って笑っている。」

「うそや、うそや。干支にキツネなんかおらへん！」

「そやったら十二支を全部覚えてそらで言う死でおとうちゃんに言い返す。」

「そうやったばっかり、おとうちゃんはこう言った。」

「はらぐらいいになってみいー」
おかげでカエちゃんは、干支を全部覚えることはめになったしまった。
こんな調子で、カエちゃんはおとうちゃんの「ホラー」によくだまされた。
なんでもむきになってしまうカエちゃんが предметやettelにならったが、おとうちゃんにはからかいがいがあるらしくて、ちょっとゆう「ホラー」をふかれる。
おとうちゃんのはからかいがいがあるらしくて、「ホラー」でだまされながらも、それでもなんだかとぼけたおとうちゃんだったから、カエちゃんはけっこうおとうちゃんとなんとかなかよしだった。

し前のことだった。そして、その年の学校の一学期の終わる少し前のことだった。学校から大急ぎで帰ってきたカエちゃんはおかあちゃんの姿をさがしていた。
おかあちゃんは居間や台所、トイレもどこにもいない。　「もー、おかあちゃん」　　「おかあちゃん、どこ？」　　カエちゃんは居間や台所、トイレもどこにもいない。
カエちゃんは怒りながら、自分だけの部屋でよそいきの服に着替えはじめた。

「はよせんと・・」

カエちゃんは時間があっていえた。
これから、なかよしのアコちゃんの誕生日があろう。そんなかエちゃんの部屋へ、なぜかおとうちゃんが入ってきた。

「あれ、おとうちゃんなんだで? 会社にいる時間とちゃうん?」

「おう、ハングとりにな」

おとうちゃんの経営している小さな会社は家から車で十分のところにあった。

「おかあちゃん、どこ行っとった?」

「さあて。あしが帰ってきたらおらんかっとちゃうか」

「ほな、おとうちゃんでええわ。お金ちょういだ」

「お金?」
「今日これから、アコちゃんの誕生会があるね。プレゼント買わなあかんからお金いるんや。

「プレゼント？いくらや」「千円」「プレゼント？いいくらや」「千円！ווしそんな大金持ってないぞ。」「なぜでんね。ふつう、お誕生会は千円のプレゼンツするって、決まってんね」「だれが決めたんや。そんなことねーだれか、知らんけど、そんななんやねん。と

にかく、千円ちょうだい」「おまえ、正月にお年玉ぎょしゃんもろて、お金いっぱいもってなかったか？」「おかあちゃんが貯金していったろって言うたから、全部おかあちゃんにあけた」「そうだ、しやあないなぁ」

カエちゃんが早く早くとさせかすと、おとうす

カエちゃん入れを取り出した。

小銭入れを取り出した。
穴のあいた五十円玉が一枚だった。
カエちゃんは、あまりの少なさに驚いた。

「こんだけ？」

「ええー、うそー！五十円なんかな、なんも
買ってへん」

「そんなことあるかいな」

「さやって・・・」

「はもちろん」

「おとっちゃん、なんかないもんはないんじゃ。
それで工夫してみろ。ほんな」

「とうちゃんかってないもんはないんじゃ。
それにつらつってもってもった。」

そう言うと、おとうちゃんはすたすたと部
屋から出ていってしまった。

部屋に残されたカエちゃんは、着替えなが
そっくり戸締りして行くんやで～

しっかり戸締りして行くんやで～

ちゃんとそこからお金を出してカエちゃんの
そう声をかけると、おとうちゃんはさがしなかった。

「そやから、おかあちゃんの方がよかったの。
そう言いながらも、カエちゃんには時間が
ない。

早くしないと、お誕生会に遅刻しそうだ。
カエちゃんは、おとうちゃんがくれた五十
円玉をポケットに入れて、外へ出て走った。
到着したのは、小学校の並びにある文房具
屋だ。子どもたちは、学校帰りにここへ立ち
寄って買い物をするのが大好きだった。

店のガラス窓のそばには流行りの陶器のキ
ャラクター人形や、かわいい図柄の筆箱が並
んでいる。

そして、そのどれにも五十円では買えない
値段がついている。

ああいうのをアコちゃんにあげようと思う

せたのに・・・"
カエちゃんはじめぞれをみつけたが
しばらくするとあきらめて、ほかのものに目を移した。
カエちゃんは五十円玉を握りしめながら、狭い文房具屋の中をぐるぐると見て歩いた。
わいい女の子が描かれた表紙のノートを一冊そしてついに、くるくるとした巻き毛のか
と、細かい花柄のついた鉛筆を二本手にとった。
あわせて五十円だ。（※昭和四十二年当時の値段）
カエちゃんはそれをレジのおばちゃんの所へ持っている。
カエちゃんは勇気をだして、文房具屋のおばちゃんに注文してみた。
文房具屋のおばちゃんは、「あいよ」
«おばちゃん、これお友だちにプレゼントす
んねん。包んでリボンもかけて」
カエちゃんはそれをレジのおばちゃんの所に包んでリボンもかけて、文房具屋のおばちゃんに注文してみた。
白い水玉の包装紙でくるんで、上からピンクのリボンをかけてくれた。
カエちゃんはその包みをおばちゃんから受け取ると、なんだかホッとした。
そしで、それを大事にかかえてアコちゃんのお誕生会へと向かっていった。
カエちゃんはそこの包みをおかげちやんから受けると、なんだかホッとした。
お誕生会はすでに始まっていて、カエちゃんのお誕生会へと向かっていった。
アコちゃんは、カエちゃんからのプレゼントが「ありがとう」と言って受け取ると、部屋の窓際に設けられたプレゼントを置くためのテーブルに置いた。
その豪華なプレゼントの山の中で、ぼんと上に乗せられたカエちゃんのプレゼントは、
そのままに集まっていったお客様たちはお誕生日プレゼントを置くためのテーブルに置いた。
彼の子たちは形が全然違っていた。なんだか一番目立っていた。なにだから一番目立っていた。そして夏休みになった。それから一か月後の夏の終わりの夜だった。暑かった夏から秋になりかけていたその夜カエちゃんはおとうちゃんと縁側に座ってご飯の後の夕涼みをしていた。カエちゃんはおとうちゃんは枝豆をお金まみにしてビールを飲んでいた。満天の星をながめていると、おとうちゃんがふいに言った。「カエ、こんにゃくの作り方知ってるか？」カエちゃんは以前に干支でだまされたことけれど、その日のカエちゃんはわざとおとちゅんにとばけてみせた。「うち知らんわ。おとうちゃん、教えて」「はな教えたら、よう聞いときや」
カエちゃんはおとうちさんが何を言うのか
と、にやにやしながら耳をかたむけた。

「今日みたいに晴れた日の夕方にな、まず畑
に水を貯めるんや」

カエちゃんは、ふんふんと聞いてる。
「それでは、その畑に長い長い竿を差しとく
なら、おとうちさんが星空を眺めるなら、
夜に星がその竿をつたって一つ一つ
落ちてくるんや」
で、次のもうそれにかえりを固めたのが、あのこん

「へぇー、納得したか。」

おとうちゃんの壮大なホラに、カエちゃん

は思わず叫んだ。

「どうや、納得したか。」

おとうちゃんの壮大なホラに、カエちゃん

にゃくなんやでー。

「へぇー。」

カエちゃんはカエちゃんの驚きぶりに上

機嫌だ。

カエちゃんにはもちろん、おとうちゃんが

いつもの「ホラ」で自分をおちょくっている

そうだろうと知しがついていた。

それでも、その日のカエちゃんはおとうち

やんの話にえらく感動して、なぜかこう答え

その星の模様があるんやね。

「そういうことやー。」

夜空から竿をたったて星が落ちてくる。

それに、僕はアイスを食べながら、うっと

カエちゃんはアイスを食べながら、うっと

れが畑の水の中に、一つ、二つ、三つ、四つ

の星の模様があるんやね。
りとその光景を頭の中に入れて浮かべた。

それはしても、ごっついいホラやなぁ・・・
カエちゃんはそう思った。
でもそれよりも、その時カエちゃんはそのロマンチックな話も入れた気になった。
カエちゃんは、おとうちゃんなのすさまじい想像力に感心し、そんな話をしてくれたこと
がなんだか嬉しかった。

そう心で思うと、カエちゃんはおとうちゃん

（おとうちゃんて、変えてもおもろいないなあ）

おとうちゃんも、さっきカエちゃんに聞か
せた話を自分でおえらく満足してい
るらしく、そうに置いてあったビールをぐいっと飲み干
した。

そんな話にはまるで動じない現実的なお Kush

れから八年がたった。

そんな調子のおとうちゃんと、おとうちゃん

も高校二年生になっ
それはその年の夏休みだった。
巴斯ケットボール部に入りたくさんの出る部活でけっこう忙しかった。
しかも、通っているのは宿題がたくさん出る高校だった。
だから夏の時間はもちろんに使おうと、カエちゃんは午前中だけ働くアルバイトをさがした。
カエちゃんのあんなに元気だったおとうちさんが肝臓の病気になって、時々寝込むようになった。
カエちゃんは元気のない会社の仕事がちょっとうまくいかなくなってしまったので、ちょっと休みんなでおとうちさんは、会社の仕事がなって一年が経っていた。
カエちゃんは高校から工夫することができなかったから、そのままゴルフ流のやり方は鍛えられたカエちゃんになった。
おとうちゃん流のやり方は自分でも工夫することができ、そこでできなかった子はまだ高っただけ。
それでもカエちゃんは元気でである、カエちゃんは元気でである。
カエちゃんは新聞をすみからすみまで読む校二年生。

カエちゃんは新聞をすみからすみまで読む校二年生。

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。

仕事は早朝六時から十時までのウェイトレ店だった。「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった。先は、大阪市中央卸売市場の青果市場。」

「早朝のアルバイトなんて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをしようやく探しだした。電話をかけて面接してなんかった。
起きることができた。
朝五時半、カエちゃんは飛び起きるとジンとTシャツに着替え、顔だけびしょびしょと洗って家を飛び出していった。
家からおよそ二十分の青果市場まで自転車をこいでいくのだが、空はまだ明けきららず、空色の空にはまだ星がまだたたいていたりすすら暗い。
ならぬくらりて覚えていた。
っとらぬ思い出した。
その星をながめながら、カエちゃんは昔おならぬ星でいっぱい・・・
うちゃんがしてくれたことこにやくの話をうすら思い出した。
あの星たちが竿にそって、ツメて降りてならぬ星があの星かあ。
十六歳になったカエちゃんだが、ホラだと思わしていていてもあの話だけはできだな、とならぬことを思いながら自転車をこぎながら風にあたっていると気持ちよく、半分眠っならぬことを覚えている。
「玉ねぎ、和泉の玉ねぎ」
市場の中のそこの喫茶店はカウンターが八席ほどしかない狭い店で、ウェイトレスといっ
ても市場の中に入っているいろいろな青果会
社の事務所へモーニングセットを出前するの
が主な仕事だった。
場内では、その日のセリがわさわさと始ま
っている。
玉ねぎ、和泉の玉ねぎ
市場の中のその喫茶店はカウンターが八席
ほどしかない狭い店で、ウェイトレスといっ
ても市場の中に入っているいろいろな青果会
社の事務所へモーニングセットを出前するの
が主な仕事だった。
場内では、その日のセリがわさわさと始ま
っている。
「玉ねぎ、和泉の玉ねぎ」
市場の中のそこの喫茶店はカウンターが八席
ほどしかない狭い店で、ウェイトレスといっ
ても市場の中に入っているいろいろな青果会
社の事務所へモーニングセットを出前するの
が主な仕事だった。
場内では、その日のセリがわさわさと始ま
っている。
「玉ねぎ、和泉の玉ねぎ」
市場の中のそこの喫茶店はカウンターが八席
ほどしかない狭い店で、ウェイトレスといっ
ても市場の中に入っているいろいろな青果会
社の事務所へモーニングセットを出前するの
が主な仕事だった。
場内では、その日のセリがわさわさと始ま
っている。
「玉ねぎ、和泉の玉ねぎ」
市場の中のそこの喫茶店はカウンターが八席
ほどしかない狭い店で、ウェイトレスといっ
ても市場の中入
野菜がぎっしり入った木箱を手鍵でひっかけて運ぶ人。

フォークリフトのハンドルをぐいぐい操作
怖い形相で働くヤッチャ場の人たちは、みんんな気まられない。

威勢のいい声が飛び交う中、殺気だってい

「そこ！邪魔、邪魔。」
「ここちヘロコー（アイスコーヒー）」
「わしはコールミーコー（アイスオーレ）」

それぞれの注文が出されると、みんなゆっくり

休憩に入ったら仲買人たちですでにいっぱい

け店に戻ると、喫茶店の狭いカウンターは

なんとか注文先の場所を探しあえて出前を届

るカエちゃんはおっかなびっくりだ。

容赦ない叱責に、初めて広い構内をうろう

のの男たちは恐ろしく、すこし勇気がいった。

「それぞれの注文が出されること、

ミンマゆっ
くり一口めを味わうように口に含む。そして、ひと息つくと「どこの高校や」と、「どっから来たんや」と「朝早よ、えらいな」と声をかけてきた。その顔はさっきまでの仕事中の殺気だった表情ではなく、ふつうのとぼけたおじさんの顔だった。

(このおっちゃんら、なんとかうちのおとうちゃんに似てる) カエちゃんです。そう思ったカエちゃんは、さっきまでの怖かったヤッチャ場のおじさんのことがすっかり恐ろしくなくなっていた。こうしてカエちゃんは、アルバイト第一日目の無事に終えることができた。

カエちゃんはホッしながら、すっかり陽がのぼって暑くなった場外を、自転車をこいで家路に向かった。それでも、朝は高校生にとってはとにかくく
眠い。冬に比べれば夏の朝なんて楽勝だとは思っていましたけれど、カエちゃんはこのアルバイトは絶対やり遂げるんだと、毎朝が至難の業だ。
でも一度始めたことだ。カエちゃんはこの朝起きているのは至難の業だ。
起きて一人で起きても「ヤッチャ場へ通っちンばって一人で起きても「ヤッチャ場へ通っ
ていたけれど、カエちゃんにとっては朝起きる
のは至難の業だ。
ところが、次の朝カエちゃんが階下へ降りてくると、おとっちゃんが台所のテーブルに座って新聞を広げている。「今日も早いね」「おうち、なんか為替のニュースが気になっってないで、おとっちゃんのは新聞を読みふけっている。カエちゃんにとっっては、おとっちゃんの相手をするより、とくん「ヤッチャ場」へ向かうとが先決だ。」「行ってきます」そう言うと、カエちゃんは自転車をおしして外に飛び出していった。

そんなカエちゃんがこんにゃくいのものの存在を知ったのは、そこの「ヤッチャ場」でのバイトの途中だった。「これ何ですか？」出前の途中で、親しuluなったお店のお客さま
カエちゃんですか？

こんにちはうまくしますか？

こんな形なら、あの形的のこ

にやくができるんですか？

この形のできあがりの々

是、どようやって作るんです

か？

كرمちがは、おっちゃんが「これ持

って茶色のごっつこうした石のような形のものを

指さして聞いた。

「ああ、これはこんなにやくいいもや」

こんなにやくいいも、こんにちはやくって、おい

んだ持ち場を通った時に、カエちゃんは黒く

イシを通って、カエちゃんは黒く

て、茶色のごっつこうした石のような形のものを

指さして聞いた。

「ああ、これはこんなにやくいいもや」

こんなにやくいいも、こんにちはやくって、おい
こえず、呆然とその場を後にしていった。

今の今まで、なぜかこんにゃくのことだけはおとうちゃんの話に醉いしれて、その実態を調べようともしなかった自分に気がついてカエちゃんは放心してしまったのだ。

いつも関東だきたきに入っているこんにゃく。

いつもの実態を調べようとしてもしなかった自分に気づかざるをえぬとなれとすぺって逃げてしも。

お箸でつかむと、つるりとすべって逃げてしも。

まうなめらかな表面。

それが、もともとはあんなごっつこっとした形をしていたんだと、その日初めて知ったカエちゃんだった。

しばらくして落ち着いたカエちゃんは、頭の中で事実を冷静にかみしめた。

カエちゃんは長いことおとうちゃんの話のなかかかった長きことと言われて、頭形をしていたんだと、その日初めて知ったカエちゃんだった。

（なんや、そうやったんか）

カエちゃんは長いことおとうちゃんの話の中で事実を冷静にかみしめた。

しばらくして落ち着いたカエちゃんは、頭をかかっていた自分がおかしくて、ちょと苦笑いした。

そしてカエちゃんは、その夏休みが終わるまで遅刻することなく喫茶店のバイトに通っ
て最後の日に無事にアルバイト代をもらうことができた。

もってきたばかりのアルバイト代の入った袋を大切にポシェットに入れて、それをなめかけにしたカエちゃんは、颯爽と自転車をこ

「やったー！」「やったー！」

顔に風があった。

その時は、なんとも言えない解放感と達成感で、心に羽がはえたような気分だった。

ふと道端に目をやると、そこはネギが刈り取られた後の畑だった。

その風のにおいで、カエちゃんには季節が夏から秋に変わりかけたのがわかった。

今このカエちゃんは、もう正しいこんにゃくにやくの作り方を知っている。

それでも「やっぱりおとうすちゃんの説が好みだな」と思った。
晴れた夜、ここに水を貯めて空まで届く竿をさしたら、ほんとうに星がそこをつたって落ちてくるかもしれない。それと同時に最近のおとうちゃんのやせた顔を思い浮かべた。
カエちゃんがアルパイトに寝過ごさないようカエちゃんがアルパイトに寝過ごさないよう、毎朝おとうちゃんがいつもホラをふりながら、そっとカエちゃんのすることを見守ってくれていたことを。
そして、おとうちゃんがいつもホラをふりながら、そっとカエちゃんのすることを見守ってくれていたことを。
そしで、カエちゃんがアルパイトに寝過ごさないようカエちゃんがアルパイトに寝過ごさないよう、毎朝おとうちゃんがいつもホラをふりながら、そっとカエちゃんのすることを見守ってくれていたことを。
だからカエちゃんはこの夏、あの「ヤッチヤツ」「ヤッチヤツ」の強烈な雰囲気にもめげず、一日も休むことなくアルバイトを続けることができた。
カエちゃんは秋の風を顔にうけ、髪をなびかせて自転車をこぎこぎ、家へと帰って行っとおとうちゃん、ありがとおね。「カエちゃんがんばるし」
た。

（おわり）